



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮部金吾の女性観
Author(s)	コマシン, ステファニー
Citation	基督教學, 51, 1-26
Issue Date	2016-07-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70077
Type	journal article
File Information	01_komashin.pdf



宮部金吾の女性観

ステファニー・コマシン

序論

本稿「宮部金吾の女性観」は、新渡戸稲造、内村鑑三らを含めた「札幌バンドの女性観研究」の一部である。⁽¹⁾ 本稿では、北海道大学大学文書館にある宮部金吾書簡（手紙六五点）、⁽²⁾ 北海道大学植物園図書資料の宮部金吾資料（手紙やはがき六〇点）、北海道大学附属図書館の宮部金吾文庫に所蔵されている彼が所有していた本の余白に書き込まれたメモなど、これまで研究されてこなかった一次資料を主に扱っている。⁽³⁾

宮部金吾の女性観を考える前に、女性観、さらに宮部の思想について研究する意義を明らかにしたい。女性観研究がキリスト教研究にとって意義があることを、荒井猷⁽⁴⁾、一色義子⁽⁵⁾、森上優子⁽⁶⁾、渡辺崇子などの学者が示してきた。新渡戸と内村は女性について数多くの主張を残しているが、彼らの女性についての考えは宗教的観点からまだ十分に研究されていない。

新渡戸と内村は「キリスト者の活動」として、女性の状況や教育に特別な関心を抱いていた。⁽⁸⁾ たとえば、「新しき女」には、「宗教の力」と「宗教心」が必要だと、新渡戸は考えていた。ここで、彼が意味している宗教とは、キリスト教のことであり、彼は「日本の宗教には若き婦人を支配するほどの、偉大なる力」がないため、キリスト教が必要だ

と考⁽⁹⁾えていた。新渡戸は、「日本女性の地位は、仏教と儒教のわが国への導入が進むにつれて低められたのであったが、それは、後者が婦人を知的に劣⁽¹⁰⁾っているとし、また、前者が彼女たちを罪多き者として輕蔑するからである」と述べている。こうした新渡戸の發言は、女性觀が宗教心の現れの一部だとみなした彼の思想をよく示している。

このような新渡戸の考⁽¹¹⁾えによるならば、宮部の場合も、女性觀を研究することは彼の宗教心を知るために欠かせない。宮部は、札幌独立キリスト教会のリーダーであつただけでなく、当時の日本の優れた植物学者の一人として、北海道大学植物園を創設し、日本植物学会会長を務め、北海道帝国大学の名譽教授であり、一九四六年に文化勲章を受章するという数多くの輝かしい功績を残した。しかし、内村や新渡戸と比較すると、菌類学者宮部の名はそれほど知られていない。その理由の一つとして、彼の出版物は専門家に向けて書かれた学術的な論文が多く、一般の人々の目にふれるものは少なかったからである。もう一つの理由として、宮部は内村や新渡戸と比べ、注目を集めるような論争的發言をあまり残さなかった。宮部は表舞台で活躍するというより、科学者として日本の環境や産業のためにたゆまず努力した（例えば、昆虫が農作物に与える被害を抑えるため菌類を使った。また、日本の食文化に不可欠で今日では世界から注目を集めている昆布について、初めて十分な調査を行なつた⁽¹²⁾）。

宮部は日本のキリスト教史においてもあまりその名を知られていないが、彼は新渡戸や内村の思想形成において重要な存在であつた。それを示す三つの例を以下で紹介しよう。

第一に、内村は、キリスト教に改宗するように熱心にすすめてくれたのは宮部だと書いている。内村は、「九年ほど前、君が「契約」に署名するように僕に強調してくれた時には、キリスト教にこんなすばらしさと豊かさがあるうとは想像もしなかつた⁽¹³⁾」と述べている。

第二に、宮部はチャールズ・ダーウィンの主張と聖書は対立するものではなく、両立できるものだ⁽¹⁴⁾と考え、他の人々にも有神論的進化論を支持するよう勧めた。内村は、一八八一年に無神論の進化論者に対し警戒心を抱いていたが、

宮部は進化論を扱った本を買い、内村に貸した。一八八二年に「もし宮部君がその『人間の由来』と『ダーウィン主義』とを安い値段で僕にゆづってくれることができれば実にありがたい。宮部よ、もし進化論に関する安い本を書店で見つけたら、ドーカ僕のために買っておいけたまえ」⁽¹⁴⁾また、「君が（中略）幾冊かの本を買ったことを聞き、（中略）宗教—科学書類で、この方面に書物を見つけたら、僕のために買ってくれたまえ」⁽¹⁵⁾と述べて、内村は宮部の手助けを求めた。一八八六年に彼は宮部に、「われわれは神の心を植物の中にしろうではないか」と提案し、「僕は、天然と歴史と聖書とが、人類に与えられた神の啓示の三脚たることを知って嬉しく思う」と語った。⁽¹⁶⁾一九二六年に内村は「私は同時に進化論者で特殊創造論者であることを余儀なくされています」⁽¹⁷⁾と結論づけ、「私は進化論で聖書を説明しようとはしない。私はその両方を事実として受け取ります。聖書は精神的な生活についての事実であり、進化論は宇宙（での物質的なもの）の成長についての事実を示しています」⁽¹⁸⁾と書いた。つまり内村は、自然と進化が神によって創造されたことを信じており、宮部の自然に関する研究から得た見識が神の心をよく理解するために助けとなる、と考えていたのだろう。

第三に、生涯を通して新渡戸と内村は宗教的なことに関して、宮部に助言を求め続けた。新渡戸は、「ぼくは、札幌でやろうと思うことを、前もってつきつきに計画しています。それらについて君と相談したい」⁽¹⁹⁾と述べ、同様に内村も、「日本でキリスト教事業を企てることについて何か善い考えが君にあるか。（中略）あらゆる暗示を何よりも喜んで待つ」⁽²⁰⁾と書いた。内村は、宮部の手紙が「いづれも精神的に啓発してくれた」⁽²¹⁾と述べて、宗教的な事柄に関する宮部の助言に感謝した。同じく、新渡戸は、「ぼくにとつて吉報であり、有益だと君が判断することは、どんな事でも知らせてくれたまえ。ぼくの性格のうち、成功や実益のさまたげになるような点は、なんなりともただしてくれまえ。どのような忠告でも、歓迎します」⁽²²⁾と書いた。内村によると、友情が壊れそうになつてしまつた時、宮部の仲裁により事なきを得たという（内村は「彼は北極星であつて、我々はその周囲をもういちど平和と調和をもつて廻

転しはじめたのである⁽²³⁾。と述べた。内村と新渡戸の関係が和解し難くなった際、宮部は調停者として中心的な役割を果たしていたようである⁽²⁴⁾。

以上の事実からも理解できるように、宮部の思想を研究することは、新渡戸や内村の思想を研究する上で有益だといえよう。

本論

(一) 宮部金吾による人間性のとらえ方

宮部の女性観は、「人間とは何ものであるか」という問いから出発していた。従って、本節では、まず宮部の人間観に注目し、その後、彼の女性観について分析する。

菌類学者として、宮部は生物が成長する上での理想的な環境に精通していた。宮部にとって、人間はそもそも動物であり、自然の秩序に従い機能し繁栄するという適切な役割を果たすため、身体的健康を維持しなければならない存在だった。「自然法則に従うようにしてみてください。それは最も残酷で厳格な主人だから、背けば必ず罰が与えられるでしょう⁽²⁵⁾」と妻の保子に指示した。また、「過労を避けるべきです。(中略) 私たちの体や心を酷使すべきではありません。自然法則を順守すべきです」などと書いている。ここから、宮部によると、自然法則とは、世界の自然現象を調整するだけでなく、人間の行動を調節するものでもある。彼がダーウィンの自然選択説を理解していたことに鑑みると、体や心を酷使することは「適応」に繋がらないと宮部が考えたのは理にかなっている。自然法則に関する宮部の見解は、被造物についてのキリスト教的考えとも不可分なものだった。内村は「君の眼には、全天然が美しく、調和し、愛である。外なる環境が順調に君を導くから、君は君の前途について心配する必要はない⁽²⁷⁾」と宮部の見解を評

価していた。つまり、宮部によると、神により設計されたものは美しさ、調和、愛といった特性を表しているため、自然法則は人間の理想的な導き手として信頼に値する。従って、体や精神を酷使することは、人間の繁栄についての神の意図に反すると考えていた。

人は、健康を追い求める「人間という動物」であるという宮部の考えは、精神的な部分においても繰り返し見られる。親戚のことを尋ねるときは、キリスト教的な「彼らは主にあって喜んでゐるか」⁽²⁸⁾（ネヘミヤ記八章一〇節、フィリピの信徒への手紙四章四節など）という言いまわしで、宮部は心身の健康を気遣っている。彼は、妻に「だからこれを私たちの相互の希望としようではないか。家では肉体、心、精神ともに健全であるように」⁽²⁹⁾と書いた。

宮部は女性の精神は養われるべきであると考えた。女性の精神を養うために、宮部は以下の方法を高く評価していた。それは、祈ること、聖書を読むこと、イエスの時代の人々の状況や考えを示す歴史小説を読むことなどであった。⁽³⁰⁾ 彼は、保子に「互いの精神と肉体のために祈ろうではないか」⁽³¹⁾、「互に絶えず祈ろうではないか」⁽³²⁾と説いた。

身体的な健康に関する考えを自然法則から学び、精神的な健康に関する考えをキリスト教から学ぶことによつて、宮部は仕事と私生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）を取るように積極的に説いた。「活発な賢い心と体を維持するため何か定職に就きなさい。他の何よりも（中略）過労ほど健康に有害なことはない。妥協線を見いだす人は賢い」⁽³³⁾と述べて、彼は「健康」や「過労」といったキーワードを繰り返している。宮部にとつて、病氣と過労は危険であり、人間が最適に機能するために、「生物としての人間とは何か」についての理解が常に必要であつた。この人間観から、宮部の考える「女性」とは、自然の秩序に留意し、健康的な精神を養う動物の「雌」としての人間だといえる。

宮部によると、健康と人々の役に立つこととは関係がある。健康という基盤の上で、人は最大限に「役立つ」（三番目のキーワード）ことができるのである。彼は、妻に「長生きして人々の役に立つ人生を送るために、互いに助け合つていかなければならない」⁽³⁴⁾と言つており、「あなたが（中略）人々の役に立ち、健康であることを神に感謝しま

す⁽³⁵⁾』と述べた。また、宮部は、友人の藤田九三郎（「イエスを信ずる者の契約」に署名した札幌バンドの学生の一人）と彼の妻に対しても、「長年にわたつて役に立ち続けること、喜び、平和であること」⁽³⁶⁾を祈つた。

以上のことから、宮部の自然神学とでも言うべきものを知ることができるだろう。つまり、すべての人は、自分が本質的に動物であるという意識と精神的な健康とを大切に、神と人間にとって役立つ存在であるべきだ、ということである。

（二）宮部金吾の女性観

宮部の生物学的な観点に基づいて、筆者は本節で女性観を理解するため、キノコなどの菌類のライフサイクルになぞらえて、女性の人生を五つの段階に分類し、それぞれの段階の女性について宮部がどのような見解を抱いていたか分析する。その五つの段階とは、（ア）胞子の発芽（出現）、（イ）菌糸体の成長（成長）、（ウ）原基の芽生え（開花）、（エ）子実体の実り（熟達）、そして（オ）担子器の放出（産出）である。

（ア）胞子の発芽・出現

菌類のライフサイクルは胞子という微細な種が世界へと飛び立つことで始まる。胞子が発芽する段階とは、少女が小学校に入学するため、自分の家から外の公的領域へと出てゆく段階にたとえることができる。現存している資料には、女子教育に関する宮部本人の発言はあまりないが、新渡戸の書簡は女子教育に対する宮部の一般的な見解を知る手掛かりとなる。明治時代初期の多くの男性が、教育を受けた女性は慢心になり、彼女らの学習への熱望は先祖に対して恥をもたらずと考えていたのに対し、⁽³⁷⁾宮部は女子教育に好意的な立場をとっており、札幌遠友夜学校において女子教育のために無償で時間や労力を割いていた。

一八八五年十一月に新渡戸は宮部への手紙で、「札幌市民学園」に対する多くの構想」を書いており、その際には

「女子部」を併設し、「刺繍、裁縫、編物、英語」および「国文学」の勉強ができるようにする——そうした仕事は、神の栄光を世に輝かしめるための大いなる一助ともなるのではあるまいか？」と述べ、一八八七年にも、新渡戸はこの考えを示し⁽³⁸⁾。一八八八年にも再度それとなく女子教育に関する考えに言及している⁽⁴⁰⁾。彼は宮部に対し、自分の留守中に学校併設を準備するように頼んだ（「次にカボ君、心から勉強したいと渴望しているのに、それができない気の毒な人々のため、私立の慈善（言いかえれば、授業料をとらない）学校を開設することができると思いませんか？」）。これに対する宮部の返信は現存しないが、新渡戸は宮部がこのプロジェクトに賛成する、あるいは、特別な関心を抱くだろうと期待していたことが推測できる。また、新渡戸は、宮部に「学園」の未来像について助言を求めている。新渡戸が親友の考えを正確に把握していたとするならば、新渡戸の手紙から、宮部が女性や貧しい人々に対する教育を支持していたとみなせるだろう。

一八九四年に新渡戸らは、恵まれない老若男女のために札幌遠友夜学校を設立した。札幌遠友夜学校は女性のために計画されたものではなかったが、少なくとも一八九六年には、主に少女に対する教育を行っていた⁽⁴²⁾。恵まれない少女のための教育、利他的なボランティア活動は「当局にはほとんど気づかれぬ領域」、「無視された分野」⁽⁴³⁾とみなされ、めずらしかったため、生徒の親は困惑している。

ときどき子供を行かせるのをいやがる母親もいます。お金を払わされ（中略）はしまいかと恐れるのです。（中略）「みなさまがたが、どうして子供たちにこんなに良くして下さるのか、さっぱりわからずにおりました。一銭のお金もお取りなさらず教えて下さり、その上あなたご自身、わざわざ私の娘を呼びに来て下さいました。（中略）ですが、どうしてなのでしょう。あなたさまは、どんな信心をなさっていらつしやるのでしょうか？」と言いました⁽⁴⁴⁾。

一日中仕事をした後で、宮部は、無給のボランティアとして札幌遠友夜学校の授業も教えた。⁽⁴⁶⁾ 女子教育に否定的な社会の見方が強いにもかかわらず、宮部の札幌遠友夜学校での慈善事業は、女子教育に高い価値をおく彼の考えを公に表明しているといえる。

(イ) 菌糸体の成長・成育

菌類のライフサイクルの第二段階では、枝を出し結合することで複雑な栄養菌糸となり、豊富な栄養分の交換を行なうネットワークを形成する。同様に、宮部は若い女性たちが相互の盛んな交流や高等教育を通じ、活動範囲を広げ、異なる考えを身につけ、彼女ら自身を成長させていくことを望んでいた。

「あなたがいつも教職と自分のための学び」⁽⁴⁶⁾に忙しくしていることが、「私に多くの喜びをもたらした」⁽⁴⁷⁾と宮部は述べており、保子がフェリス・セミナリーを卒業した後も、生涯を通して学習するよう心を寄せていた。しかし、宮部は自分の妻の教育のみに関心を持ったわけではない。藤田が「強い信仰を持つ学者であり、(中略)高潔な熟達した」女性と結婚した際、宮部は「甚だ喜んだ」⁽⁴⁸⁾。彼は友人巖本善治(『女学新誌』の編集者であり、昭和女子大学設立の協力者)が松川甲子(フェミニストの作家、本名よりも若松賤子という筆名でよく知られている)と結婚したことを初めて聞いたとき、その理由は「彼女の徳と学問」であると考え、宮部は「すぐくよろこばしい」⁽⁴⁹⁾と賞賛した。

一八八六年から一八八九年のハーバード大学留学中、宮部はアメリカの女子教育にも注目した。「毎週、だいたい二回かそれ以上、講演会の案内がある。(中略)ボストンほどこの国の中でよい教育を受け教養ある女性がいるところはない。この優れた特徴は多くの女性が聴衆の中にいることである。多くの場合、紳士の数を超えている」⁽⁵⁰⁾と宮部は感銘を受けた。「教養ある淑女」がいることは大学の「優れた特徴」の証だと宮部が考えていた事実から分かるように、彼は女子教育そのものを支持していたと言えるだろう。

そして、アイダ・シーモア (Ida Seymour) (宮部の友人の菌類学者アーサー・ブリス・シーモア [Arthur Bliss

Seymour] の三女) とミズーリ州植物園で会った際に、宮部は、「彼女は植物学者として父のあとを追ひ、もっぱら植物病理を研究している。両親は、もちろん、彼女を大いに誇りとしている」⁽⁵¹⁾とほめた。しかし、「娘より息子が教育を受けることは(アメリカの)社会の人々にとって一般的である」と気づき、それは経済的な理由によるとした。「この授業料、下宿代、服飾費などが高額なので、この国の金持ちもこの大学に息子たちしか通わせられない」⁽⁵²⁾と書いている。

折しも宮部が留学中、一八七九年にボストン女性教育協会によって設立された女性のための高等教育協会 (the Society for the Collegiate Instruction of Women、「アネックス」という名でよく知られており、後にラドクリフ・カレッジとなった) はハーバード大学の教授を雇い、女性にも高等教育を受ける機会を提供しようとした。女性はハーバード大学で授業を受けることが許されていなかったため、女生徒たちはそうした授業を大学外で、学位を与えられることなく受講したが、授業はハーバード大学で教えられるものと同じ内容だった。しかし、女性に教えることを良く思わない教授もハーバード大学には多数存在した。一八八三年にアネックスは大学の一部として公式に認めてくれるように説得したが、ハーバード大学は拒否した。⁽⁵³⁾

一九一五年に東北帝国大学の第一回評議會に参加し、大学令案の審議をするため、宮部は仙台に行った。大学令案には、東北帝国大学に入学する権利を高等女学校卒業者にも拡大する規定が含まれていた。宮部は、大学の収容人数に制限を設ける修正案と共に、新大学令案に賛成した。その後、大学令案は貴族院の教育調査会が反対したために暗礁に乗り上げたが、最終的には施行された。⁽⁵⁴⁾ 帝国大学の中で、最初に女性の本科への入学を許可したのは東北帝国大学である。その後、宮部は札幌キャンパスの女子入学調査委員会の委員長となり、一九一六年には宮部も属する農科大学教授会が女子学生三人の選科への正規入学を許可した。⁽⁵⁵⁾ 東北帝国大学農科大学は一九一八年に北海道帝国大学になった。

その後、北海道帝国大学は一九三五年に女性の本科への入学を許可した（大阪帝国大学と同じ年）。東京大学は一九四六年になるまで女生の入学を許可しなかった。一九四三年の戦時下に、ラドクリフの女子学生はハーバードの教室に入ることを許されなかった。⁽⁵⁶⁾一九六三年までラドクリフの学生はハーバードの学位を与えられなかった。北海道帝国大学初の女性の選科生は学士号を取得することはなかったが、他の大学に先立って北海道帝国大学は女子学生に学位を与え始めた。

以上の実例からも理解できるように、宮部は女子教育に対し積極的な立場であつたといえよう。北海道帝国大学で本間ヤスが一九二三年に修了証を取得した時、宮部は、「本間さんは頭脳頗る明晰、今後優良の成績で卒業される事となつた、卒業論文は『粉病菌科の分生胞子に就て』と言ふのでウドン粉病菌胞子のピプロシン体と称する貯蔵物質の化学的成分に関する学術的研究でなく立派なものだ」⁽⁵⁷⁾（原文ママ）とほめた。宮部は帝国大学の門戸を女性に開放することに寄与し、さらに女性が学問に従事することが科学への貢献となると認めていたようである。

（ウ）原基の芽生え…開花

菌類の第三のライフステージは、原基という新しいキノコの芽を出すことである。同じく、宮部の考えでは、女性には美徳を育てると、花のように咲くことができた。彼は、日本の女性には“a Japan Lady”という独特の資質があると考えた。理想的な大和撫子を持つはずの長所とは、気高いこと、辛抱強いこと、忍耐強いこと、質素であること、率直であること、優しいこと、人に共感できること、教養のあること、謙虚なこと、自己犠牲の精神を持つこと、子孫に永遠の良い影響を与えること、である。彼は賞賛できない性格の特性として、虚栄心に満ちていること、狹量なことをあげている。⁽⁵⁸⁾

女性らしい適切な振る舞いに関する宮部の考えは服装にまで及んだ。彼は「日本の衣装に比べ、外国の服装は、特に戸外で便利なこと、そして正しい服装をし、その着方の適切な訓練を受けている場合には、非常に上品であること

に強い確信を持っていた」⁽⁵⁹⁾ため、すでに西洋のファッションを取り入れていた女性を認めていたが、ただしそれは正しい服装をするための金銭的な余裕があるという条件つきであった。それができるほどの経済的な余裕がないとすれば、和装を続ける方がいいと彼は考えた。

また、原基という新しいキノコの芽を出すことは、女性が婚約者の役割を引き受け、新しい社会的アイデンティティやライフスタイルを作りゆく過程と似ている。

女性は早く結婚すべきだという考えではなかったが、⁽⁶⁰⁾宮部は結婚していない者には「操を守ること」を期待していた。⁽⁶¹⁾さらに、彼は、予定していた三年間の留学期間中は婚約者保子に経済的に自立してほしいと願っていた（「結婚するには忙しすぎる」⁽⁶²⁾ため、彼らの婚約状態は六年以上であった）。

「我が最愛の良き人」⁽⁶³⁾や「最愛の私の人」⁽⁶⁴⁾などの愛情深い呼び掛けの言葉に満ちた書簡を、宮部は遥か彼方から送った。⁽⁶⁵⁾宮部と彼の研究に対する保子の自己犠牲的な支えを、宮部は複雑な思いで受けとめていた。宮部は保子が「私のために全てのつらい病氣と苦難に耐える」⁽⁶⁶⁾ことを期待すると同時に、「私に自身を捧げると進んで約束したことに、言葉で表せないほど感謝している。こんなことを求めている自分を恥じている」⁽⁶⁷⁾と打ち明けた。愛情深い宮部は婚約者の自立的な生き方を尊敬していたが、自分を恥じつつも、結婚前に過大な犠牲を彼女が払ってくれることを受け入れていた。

(エ) 子実体の実り…熟達

宮部がキリスト教の神を配偶者のように表したことは興味深い点である。彼は神を「一生慰める者、助け手、連れ合い、幸いも災いも共有する者」⁽⁶⁸⁾だと表現している。この表現は創世記二章一八節のアダムとイヴの関係に基づいたものだと思われる。⁽⁶⁹⁾

菌類が繁茂を迎えるライフステージは、原基が十分に成長し、子実体の成熟にたどり着く時である。宮部の考えた

花開く理想的な既婚女性とは、配偶者とともに職業上の共同作業をすることができ、同時に家庭を管理する能力を持っている者のことであつた。

宮部の理想は、女性が教育を受け、「健康によい、美しい職業を見つける」ことだと述べ、「知的かつ道徳的な健全さを与えてくれる」「神からの毎日の義務に自らの思いや注意を向ける者だ」と述べた。⁽⁷⁾ 保子はフェリス・セミナリーで働き、女子教育論者たちと交流していた。⁽⁸⁾ これについて宮部は、保子が彼女の同僚たちとゆたかな時間を過ごすことは、「一番よい場所や交際である」と述べていた。⁽⁹⁾

宮部の女性観において特に興味深い特徴は、職業上の分野で配偶者とともに働くのを、理想的な夫婦関係としたことである。宮部は、マサチューセッツ州のウッズホール市で合衆国水産委員会生物學実験所 (Biological Laboratory of the U.S. Fish Commission) にいたとき、ワシントン・アンド・ジェファーソン大学名誉教授で寄生蟲學の第一人者だつたエドウィン・リントンとその夫人との協力關係に感銘を受けた。宮部は、「私たちが働いている同じ研究室でリントン博士は奥さんとともに働いている。リントン夫人は魚の体に住んでいる小さな寄生蟲の挿絵を描き、夫の手助けをしている。二人は最も勤勉な人たちで、幸せそうに見える。また、見ていて愉快だ」と称賛している。⁽¹⁰⁾

彼は保子が絵を描くことに興味を持ち始めたと聞くと、リントン夫婦のように、彼女と一丸となつて仕事に勉めることを期待し、喜んだ。「知つてとてもとてもうれしい。諦めないでください。習得するまで続けてください。大きな助けと喜びをもたらすことになるでしょう。将来、私の最愛の妻に私の本の挿絵を描くことをお願いするかもしれない⁽¹¹⁾」と告白した。宮部は學問的な植物研究の仕事について、保子の助けを求めた。「小冊子と標本植物が入っている小包を時々送ります。包みを解き、種類ごとに分類してください」と任せた。⁽¹²⁾

宮部は職業の種類に關係なく、夫婦が協力して同じ仕事をするのが理想だとみなしていたようにも思われる。當時、新渡戸は日本における夫婦の好ましくない状態について以下のように述べていた。

西洋の（中略）一家悉く同じテーブルに集つて、（中略）知識的に語り合ひます。そして日本であれば、そんな事を女や子供が訊いても解るものと云ふやうな事までも、訊かれ、ば丁寧に教えてやり、知らなければ知らないと云ひ、又女や子供から学ことがあれば学びます。（中略）或る有名な実業家で、殆ど自分の子供の顔を見ないと云ふ人があります。どうしてかと云ふに、朝寝をするから自分の起きる頃には、子供はもう学校へ行つて家に居ず、それから（中略）正午頃から自分の仕事先へ出掛け、（中略）夜遅く帰宅するので、その頃には子供はもう寝て居ると云ふやうな訳ださうです。かうやつて子供や妻と一緒に顔を会せることも碌々ないので、従つて女や子供ばかりの話は、知識的でない。⁽³⁵⁾

このような事態に陥るのではなく、社会のあらゆる階層の夫婦が知識を交換し、さらに一緒に働くことが、宮部にとつて好ましいものであつたと考えられる。宮部は、夫と妻の心は愛によつて「編み上げられていくの」⁽³⁷⁾であり、彼らはそれぞれ「お似合い」⁽³⁸⁾の壮志を抱く者であるべきだと考えた。「優れた取り合わせ」とは、夫婦が「互いの尊敬と共同作業により、各々の人生に役に立ち、高潔なものとなる」⁽³⁹⁾ようなものであつた。

宮部は妻という立場に尊敬の念を抱いており、札幌バンドの一員だった足立仁の結婚に関して新渡戸に宛てた手紙では、「優しい愛情にあふれる夫」が「愛する妻、愛おしき妻、可愛いわが妻、わが愛すべき妻、好みの愛称、あるいはいかなる呼び方であれ、自分の女王（queen）に敬意を示すための好みの愛称」⁽⁴⁰⁾で呼ぶべきだと書いていた。彼は、「わが」といふ妻よ、神の祝福がありますように、（中略）あなたのために祈っている、私はいつもあなたへの愛情であふれる夫」⁽⁴¹⁾だ、といった優しい言葉遣いで保子に手紙を書いた。

宮部は、妻たるものは、家の中をいつも清潔に保ち、片付け、家具を整え、コーヒーの淹れ方を知り、適切な調味料を使って食事を出せる、といった家庭的な能力を身につけることを望んだ。⁽⁴²⁾それにもかかわらず、妻一人で全ての

家事をこなすことは要求せず、助けを雇う考えを認めた。⁽⁸³⁾ 宮部は、家事を効率良くこなす女性の知恵を評価していたが、彼自身も意欲的に家事を分担して引き受けていた。⁽⁸⁴⁾ それでも、自分の妻が家事においてかなりの部分を負担していることを知っていた。⁽⁸⁵⁾

(オ) 担子器の放出…産出

子実体の担子器が胞子を形成して飛散すると、菌類はそのライフサイクルを終える。同じく、成熟した女性は、文化、家族、宗教などについて深く学び、仕事を行なう段階を過ぎると、それまで学んだ意味や有用性という収穫物を社会に還元し、貢献する。

宮部は、科学、文学、宗教、世界の出来事などについての議論を楽しむ教養ある女性を尊敬した。⁽⁸⁶⁾ 彼は、「十分に西洋思想と西洋での訓練を受けた淑女と紳士として品格のある社会」⁽⁸⁷⁾ を心に描くようになった。彼は、札幌を「日本の北のアテネ—清い宗教や交際による学習および芸術の中心」⁽⁸⁸⁾ へと変えることを夢見ていた。

興味深いことに、「女性というものは動物の雌としての人間で、健康を維持し役に立たなければならぬ」という宮部の女性についての考えは、彼の優生学への関心と結びついているようである。同年輩の多くの科学者と同様に、宮部は「淘汰、つまり、今度は意識の淘汰による進化」⁽⁸⁹⁾ (すなわち、自然淘汰による人間の進化よりも、さらに進むこと) を説く優生学について学んでいた。宮部が優生学運動について全面的に賛成だったか否かは定かではないが、彼は優生学を提唱する本を集めており、興味を持っていたようである。女性の体、多産性、職務に関し優生学が明示的、暗示的に示す事柄について、新渡戸のように宮部がはつきりとした見解を述べることはなかった。しかし、宮部の信念に優生学の考えが重なる点から、彼は優生学運動の支持者だったと考えることができる。⁽⁹⁰⁾

残念ながら、宮部の書簡には母親の役割に関する記述はあまりない。宮部は「純粹なクリスチャン・ホームはこの世の恵みをもって冠とされる」⁽⁹²⁾ と考え、簡素な生活を営む宗教的活動に特に感動した。⁽⁹³⁾ 宮部は、「互いに愛であふれ

ている平和と調和の家族⁹⁴」関係に懂れた。

宮部は母のもとに帰省しても、十分な時間をとることはなかった。彼は母親と同じ家に滞在していても、実家の近くの大学で研究していたため、「朝から夕方まで（中略）修道士的な生活⁹⁵」を送っていた。しかし、彼は両親というものに敬服していた。新渡戸の母が亡くなったとき、宮部が「悲嘆のあまりベッドの上に伸びて床に臥せて」親身になっている、と内村は新渡戸に伝えていた。同様に、姑が亡くなったときも、宮部は「驚きで口がきけないほどだった⁹⁷」と報告しているが、亡くなる前に、宮部や愛するすべての人のため彼女が祈ったはずだと信じた。

成熟し、手で収穫され、バターを塗ったトリュフは、感覚が満足するような繊細な風味を持っている。それと同様に、宮部の女性観は、生涯の各段階を経過し、社会の向上に独特の薫りをそえて大きく貢献するという点で頂点を迎える。彼の見解では、教養と文化的な会話、円満な家庭、信仰的行為で女性は社会に報いるのである。その過程には、優生学を通し女性が役に立つべきだという希望が含まれているのかもしれない。だが、敬虔な母親が幸せな家族の中で愛する人のため祈っている、というイメージが含まれていることも確かである。

結論

本研究は、宮部金吾の書簡というこれまで研究されてこなかった新資料を用いることで、キリスト教学の分野で見過ごされてきた彼の考えや信仰について、学術的対話の俎上にのせようと試みた。今後宮部の書簡がより多くの研究者に読まれ、さらなる議論が展開されることを期待する。まずその第一歩として女性観という視点から資料を分析した。

宮部の人間本性についての考えは、本文に記したように、いわばある種の自然神学に根ざしており、身体や精神の

健康についての議論を含んでいる。本稿では、宮部の女性観を、彼が好んでいた菌類(98)のライフサイクルになぞらえて論じた。宮部は、公的領域へと出てゆき、知性を養い、美德という花が開き、協調において繁茂し、意味があり人の役に立つ貢献を社会になすことが女性における人生の段階である、と考えていた。

宮部金吾は、当時の学識ある日本人男性が、どのような女性観を持っていたかを知るための、有用な一例となっている。宮部は、女性に学士号を与えることについて賛成票を投じなかつた。(99)そして、婚約中や結婚後に、彼のために妻が多大な犠牲を払うことを受け入れていた。しかし、彼は帝国大学の門戸を女性に開放しようと役割を果たし、ボランティアや職場を通して積極的に女子教育に携わつた。(100)新渡戸や巖本は、彼らのキリスト教信仰により、特定の分野において女性の地位を向上させる必要があると感じていたが、学問的な専門分野において夫婦二人で働く関係を理想的だとした点は、宮部に独自のものではあろう。

さらに、身体的・精神的な健康を守るために仕事と私生活の調和を厳密に守るべきだという宮部の考えには、今日でも聞き入れるべきところがあるのではないか。新渡戸と内村が、静養のため研究や仕事を中断せざるをえなかつたのに対して、宮部は適度な休息を取り入れながら生産的に日々の生活を送っていた。(101)

宮部の活動はあまり目立つものではなかつたが、新渡戸と共に日本の女子教育の発展に貢献し、「有神論的進化論」というキリスト教思想を内村と共有していることからしても、彼らの思想形成を考えるうえで、宮部は重要な人物であるといえるのではないか。

キノコは出しゃばらない。しかし、菌類の生態を調べれば、興味をそそる世界を見つけることができる。宮部金吾の人物や考えを仔細に検討すれば、彼の宗教思想に独自の知恵を見出し、「札幌バンド」についてもさらなる研究方向を見出せるであらう。

注

- (1) 内村は、自分と新渡戸、宮部の三人を『the Sapporo triumvirate (札幌三頭政治)』。(山本泰次郎の和訳では「札幌三人組」と呼んでいた。後に「評論家」が彼ら三人を「北海トリオ」と呼んだことから、新渡戸の孫娘である加藤武子は「北海トリオ」という用語を使っている。加藤武子・寺田正義『マイグランパ新渡戸稲造・ただ一人の生き証人の孫が語る』朝日出版社、二〇一四年、六三頁。内村鑑三『1月19日太田稲造宛在来(封書◇)米国ペンシルヴァニア州エルウインより』『内村鑑三全集』第三六巻、一九八三年、一二九頁。内村鑑三・山本泰次郎訳「第六一信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集五』教文館、一九六四年、一一五頁。

- (2) 北海道大学大学文書館で、内村、新渡戸の全集に収められていない、内村(一二点)、新渡戸(二二点)、メアリー(萬里子)・エルキントン・新渡戸夫人(二〇点)宛の手紙、さらに大島正健(一点)、広井勇(二一点)、渡瀬庄三郎(三五点)、ウィリアム・ブルックス(一九点)、メリマン・コルバート・ハリス(二点)、ダビッド・P・ペンハロー(二点)、ウィリアム・ウィラー(二点)らが宮部へ宛てた書簡も調べた。特に明記しない限り、宮部金吾の手紙からの引用は全ての私訳である。他の著者の英文からの引用は既訳による。以上のような手紙の概要については次の書籍による。秋月俊幸編『書簡集からみた宮部金吾―ある植物学者の生涯』北海道大学出版会、二〇一〇年。

- (3) これら宮部の手紙のほとんどは、一八八〇年―一八八六年に札幌や東京から、一八八六年―一八八九年にマサチューセッツ州のケンブリッジから、一九一九年にアメリカとヨーロッパから書かれたものである。これらの手紙は生涯に及ぶものではないので、本稿で論じるのは彼の女性観の変遷や展開ではない。

- (4) 荒井献『新約聖書の女性観』(岩波セミナーブックス27) 岩波書店、一九八八年。

- (5) 一色義子「河井道子における女性視点」『恵泉女学園大学人文学紀要』七号、一九九五年、五九―七二頁。

- (6) 森上優子「安井てつの女性論」『日本宗教学会編『宗教研究』第七四(四)号、二〇〇一年、一三九―一四〇頁。森上優子「新

渡戸稲造の修養論—女性の修養を中心として—」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科編『人間文化研究年報』二六号、二〇〇二年、一一九—一二六頁。森上優子「婦人雑誌と新渡戸稲造」日本宗教学会編『宗教研究』第七九（四号）二〇〇六年、一二七—一二八頁。

(7) 渡辺崇子「新渡戸稲造の欧米留学と女子教育観の形成過程—津田梅子との比較を通して—」北海道基督教学会編『基督教學』四五号、二〇一〇年、一〇一—一八頁。

(8) M・W・ヘインズ・佐藤全弘訳「手紙」(「インターチェンジ」寄稿文)『新渡戸稲造全集』第三卷、教文館、一九八六年、五〇頁。大津光「基督教友会日本年会と新渡戸稲造」キリスト友会日本年会、二〇一二年、一二頁。

(9) 新渡戸稲造「新婦人観」(「婦人に勧めて」)『新渡戸稲造全集』第一卷、一九八四年、一九二頁。

(10) 新渡戸稲造・松下菊人訳「日米関係史」(「日本国民、日米関係史」)『新渡戸稲造全集』第一七卷、一九六九年、五五九頁。

(11) Kingo Miyabe and Sawada Kaneyoshi, "On Fungi Parasitic on Scale-Insects Found in Formosa," The Journal of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, Sapporo, Japan V, no. 3 (March 1913): 74; Kingo Miyabe, "On the Lamiariaceae of Hokkaido," The Journal of the Sapporo Agricultural College 1 (1957): 1—50. 北海道博物館協会学芸職員部会「北海道のコンブ漁業と宮部金吾博士」【コナマリレー第40回】『集まれ！北海道の学芸員』二〇一三年 (<http://www.hk-curators.jp/archives/1465>)。

(12) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第九一信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集五』一九六四年、一九一頁。

(13) 内村鑑三 How I Became a Christian: Out of My Diary 『内村鑑三全集』第三卷、一九八二年、巻末五九頁。

(14) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第九信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集五』二六頁。

(15) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第一一信(英文封書)」同書、三五頁。

(16) 内村は、「小さな海蛇やケンビ鏡的な菌は、キリスト信者の神によって刻まれたその美と秘密とを明らかにしようとすれば、一人のクリスチャンの英雄の生涯とその価値を争うに足りる。(中略)兄弟よ、ゆえに、働こうではないか」とも書いた。内

村鑑三・山本泰次郎訳「第一九信（英文封書）」同書、一九一頁。内村鑑三・山本泰次郎訳「第三七信（英文封書）」同書、七三頁。同じく、札幌バンドの土木工学者広井勇は、宮部に「君は自然の研究において真のキリスト教精神をよく養育してきた。人生の終わりまでにそうでありますように」と書いた。広井の引用は筆者による私訳。廣井勇『廣井勇04』北海道大学文学館、一八八三年六月七日、一頁。

- (17) 筆者による私訳。現在、「特殊創造論」（あるいは、「特殊創造説」という専門用語は、プロテスタントの根本主義とカトリック教会によって異なった使われ方をしている。しかし、内村はこれらのどちらの用法でもなく、『種の起源』の中でダーウィンが使った“special creations”（八杉龍一の和訳では「個々の創造物」と「個々に創造されたもの」、堀伸夫と堀大才の和訳では「特別な創造」と「特殊な創造物」）の用法に言及したのだと思われる。それは、種及び個体が、変異によって形質転換するのではなく、神の命令に従って、奇跡的な存在となること、あるいは瞬時に変容させられることを意味した。内村は「生命の進化の過程の中に特別な創作物（突然変異）あるいは何でも好きなように呼ばばよい）を観察することができよう。つまり、見た所原因がない、それにも関わらず根本的で画期的な説明不能の急な変化のことである」と説明した。この解釈から、内村は「特殊創造論者」という言葉で、聖書の創世記一章～二章三節の天地創造説話を字義通り信じていることではなく、万物の創造主としての神が、現在においても創造に積極的に関与し続けていると信じる立場を意味していたと思われる。その場合、進化もまた神の創造の一部として受け入れているのだろう。内村鑑三『Fundamentalism and Modernism』、『内村鑑三全集』第三〇巻、一九八二年、一六四—一六五頁。

- (18) 筆者による私訳。英語では、“the cosmic growth”が意味するものとして二つの可能性が考えられる。一つは、宇宙のインフレーション（膨張）である。もう一つは、全世界の物質的なものの成長である。進化論との関連で、おそらく後者の意味を考えていたのだろう。同書、一六五頁。

- (19) 新渡戸稲造・鳥居清治訳「第十七信（一八八七（明治二十）年十二月四日）」（『宮部金吾宛書簡』、『新渡戸稲造全集』第二二巻、

一九六九年、二七九—二八〇頁。

- (20) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第九二信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集五』一九三頁。

- (21) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第九一信(英文封書)」同書、一九〇—一九一頁。

- (22) 新渡戸稻造・鳥居清治訳「第八信(V)(一八八四[明治十七]年十月五日)」(『宮部金吾宛書簡』『新渡戸稻造全集』第二二卷、二五三頁。

- (23) 内村鑑三・鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店、二〇〇五年、二三頁。

- (24) 加藤武子は内村と新渡戸の「書簡を呼んでみると、暖かくおだやかな金吾が、彼らをつなぐ要であったことがわかる」と述べた。

内村鑑三「1月11日宮部金吾宛札幌(封書◇) 柏木より」『内村鑑三全集』第三八卷、一九八三年、八頁。加藤武子・寺田正義『マイグランパ新渡戸稻造・ただ一人の生き証人の孫が語る』六五頁。

- (25) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)』北海道大学植物園図書資料、一八八七年二月二〇日、一頁(m10588_01)。以下『宮部金吾書簡(...宛)』(整理番号がニケタ)とあるのは、この北海道大学植物園図書資料のことである。

- (26) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)03』一八八六年一月一日、一一頁(m10580_01, m10580_02)。

- (27) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第五四信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集七』一九六四年、一〇三頁。

- (28) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)09』一八八七年九月二日、四頁(m10586_04)。

- (29) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)03』二頁(m10580_02)。

- (30) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸へ太田▽稻造宛)009』北海道大学文書館、一八八四年二月二〇日、四、七頁。以下『宮部金吾書簡(...宛)xxx』(整理番号がニケタのもの)とあるのは、この北海道大学文書館の資料である。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)05』一八八七年三月二日、二—三頁(m10582_02, m10582_03)。

- (31) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)02』一八八六年一〇月三日、六頁(m10579_26)。

- (32) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)02』一九一九年五月二日、三頁 (mi0536_03)。
- (33) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)16』一八八九年三月五日、一頁 (mi0533_01)。
- (34) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)41』一九一九年一月三日、一頁 (mi0575_01)。
- (35) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)07』一八八七年六月一日、一頁 (mi0584_01)。
- (36) 宮部金吾『宮部金吾書簡(藤田九三郎宛)007』一八八七年二月二七日、一頁。
- (37) 中島益吉編『名媛の学生時代』読売新聞社、一九〇七年、四五頁。唐沢富太郎『教師の歴史—教師の生活と倫理』創文社、一九五五年、一一〇頁。
- (38) 新渡戸稲造・鳥居清治訳『第九信(VI)(一八八五[明治十八]年十一月十三日)』(『宮部金吾宛書簡』)『新渡戸稲造全集』第二二卷、二五五頁。
- (39) 新渡戸稲造『15) Bonn, Germany. Breite Strasse 46A VIII. 7, 1887』(Letters to Kingo Miyabe 1884-1889)『新渡戸稲造全集』第二三卷、一九八七年、四三五頁。
- (40) 新渡戸稲造『18) Bonn, Am Rhein. II. 2., 88.』(Letters to Kingo Miyabe 1884-1889) 同書、四四二頁。
- (41) 新渡戸稲造『第九信(VI)(一八八五[明治十八]年十一月十三日)』(『宮部金吾宛書簡』)『新渡戸稲造全集』第二二卷、二五六頁。
- (42) 新渡戸稲造『11) To Brother Joseph Elkinton: Sapporo Jan. 3, 1896』(Letters to the Elkinsons)『新渡戸稲造全集』第二三卷、五八八—五九〇頁。
- (43) 新渡戸稲造・佐藤全弘訳『二十三、日本の女性』(英文大阪毎日寄稿文)『新渡戸稲造全集』第二二卷、一六六頁。
- (44) 生徒の母親の「みなさまがた」とは宮部を含む札幌遠友夜学校の先生や教職員を指す。新渡戸稲造・加藤武子訳『二義弟ジョセフ宛一八九六年一月三日(札幌)』(『エルキントン家宛書簡』) 同書、四六四頁。
- (45) 須田洵『新渡戸稲造の思想と札幌遠友夜学校精神の今日的意義』(『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える』会報三号)、『札幌

幌遠友夜学校創立120周年 記念誌』二〇一五年、一一―一二頁。

(46) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)03』一頁 (mi0580_01)。

(47) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)10』一八八七年一月三日、三頁 (mi0587_03)。

(48) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸八太田ノ稻造宛)009』八―九頁。

(49) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)13』一八八八年四月七日、四頁 (mi0590_04)。

(50) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)12』一八八八年二月五日、七―八頁 (mi0589_07, mi0589_08)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)18』一八八九年六月一日、八頁 (mi0595_08)。

(51) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)10』一九一九年六月二日、三頁 (mi0544_03)。

(52) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)06』一八八七年五月一日、四頁 (mi0583_04)。

(53) Helen Lefkowitz Horowitz, "Remarks for 'It's Complicated: 375 Years of Women at Harvard,'" Radcliffe Institute for Advanced Study, April 23, 2012, <https://www.radcliffe.harvard.edu/news/in-news/remarks-its-complicated-375-years-women-harvard>.

(54) 一九三〇年に新渡戸は、「当局は、女性の高等教育に対して、今なお保守的態度をとっている。大学は女性に門を開こうとしない」と述べた。伝道者が設立した高等学校や大学について、「政府からはほとんど援助をうけていない。むしろときには薄情な態度を示された」と述べた。山本美穂子「佐藤昌介の女子高等教育論―北海道帝国大学における女性の入学をめぐる」『北海道大学文書館年報』三号、二〇〇八年、二三―二四頁。新渡戸稻造・佐藤全弘訳「109 女性の高等教育」(『編集余録』)『新渡戸稻造全集』第二〇巻、一九六五年、一五五頁。新渡戸稻造・佐藤全弘訳「108 少女のためミッション・スクール」(『編集余録』)同書、一五五頁。

(55) 選科は修業年限が本科と同じだが、選科の学生には学士号は与えられなかった。そのため、一部の先行研究では、こうした女性の入学も差別待遇だと評されている。山本美穂子、前掲「佐藤昌介の女子高等教育論―北海道帝国大学における女性の

入学をめぐる―」二九―三〇頁。

- (56) President and Fellows of Harvard College, "It's Complicated: 375 Years of Women at Harvard," Radcliffe Institute for Advanced Study at Harvard University, 2015, <https://www.radcliffe.harvard.edu/schlesinger-library/exhibition/is-complicated-375-years-women-harvard>.
- (57) 山本美穂子「佐藤昌介の女子高等教育論―北海道帝国大学における女性の入学をめぐる―」三五―三六頁。
- (58) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)05』四頁 (mi0582_04)。
- (59) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)10』四頁 (mi0587_04)。
- (60) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)05』四頁 (mi0582_04)。
- (61) 青年寄宿舎友会「大正一四年九月二六日月次会 宮部先生 (control Your Appetitesを語る) (原文ママ)『宮部金吾と舎生たち―青年寄宿舎107年の日誌に見る北大生』北海道大学出版会、二〇一三年、七九頁。
- (62) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)08』一八八七年八月一四日、四頁 (mi0585_04)。内村鑑三・山本泰次郎訳「第一七〇信(英文封書)」「内村鑑三日記書簡全集五」一四二頁。
- (63) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)03』三頁 (mi0580_03)。
- (64) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)05』一頁 (mi0582_01)。
- (65) 四方英四郎「青年宮部金吾の愛と希望―若き日の手紙から」『宮部金吾博士を語る―北海道大学創基125周年宮部金吾先生没後50年記念シンポジウムの記録』北海道大学大学院農学研究科(札幌農学振興会)二〇〇一年、二―五頁。
- (66) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)02』一八八六年一〇月三日、五頁 (mi0579_25)。
- (67) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)08』四頁 (mi0585_04)。
- (68) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸へ太田へ稲造宛)005』一八八三年四月二六日、五頁。
- (69) 宮部の英語は "I have been blessed with a life long comforter, a helper, a mate, a sharer of bliss and woe" だ。"Help meet" や "help

mate”は創世記二章一八節にある「彼に合う助ける者」の英訳である。“Meet”が古い言葉であるせいで、近代の読者は勘違いを起こしてしまった。“Help”(名詞) + “meet for(前置詞 = suitable for)”の代わりに、“help meet”を名詞として、“helper”(助け手)の意味に読み間違えてしまった。その後、“meet”(に会う)の意味)と“mate”(連れ合い)の意味)は子音が似ているため、“help mate”(名詞)という新語を作ってしまった。この流れのため“helper”と“mate”の言葉は、両方、英語圏の文化で創世記二章と結び付けられてきた。ヨハネ福音書二四章二六節とジョン・ミルトン『失楽園』にある「結婚愛―アダムとイーヴ」の詩も反映していると思われる。理由は、“Comforter”(慰安者)はヨハネ福音書一四章二六節にある「弁護者」の有名な英訳であり、“Bliss and woe”(幸いも災いも)という言葉を夫婦関係に用いたのはジョン・ミルトンである。

- (70) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)14』一八八八年七月一日、一一二頁 (mi0591_01, mi0591_02)。
- (71) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)05』三頁 (mi0582_03)。
- (72) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)14』一頁 (mi0591_01)。
- (73) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)08』二頁 (mi0585_02)。
- (74) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)07』二頁 (mi0584_02)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)10』三頁 (mi0587_04)。
- (75) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)28』一九一九年九月四日、七頁 (mi0562_07)。
- (76) 新渡戸稲造「家庭生活を楽しむには」(婦人に勧めて)『新渡戸稲造全集』第一巻、四七―四八頁。
- (77) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)13』四頁 (mi0590_04)。
- (78) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸△太田▽稲造宛)008』一八八三年二月八日、四頁。
- (79) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸△太田▽稲造宛)009』八頁。
- (80) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸△太田▽稲造宛)004』一八八二年一〇月二日、二―三頁。

- (81) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)37』一九一九年二月二日、四頁 (mi0571_04)。
- (82) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)10』二、四、六頁 (mi0544_02, mi0544_04, mi0544_06)。
- (83) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)28』三頁 (mi0562_03)。
- (84) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)06』六頁 (mi0583_06)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛) 07』三頁 (mi0584_03)。
- (85) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)22』一九一九年八月七日、三頁 (mi0558_03)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)37』一頁 (mi0571_02)。
- (86) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)12』一九一九年七月七日、三頁 (mi0546_03)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)10』三頁 (mi0587_043)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)12』八頁 (mi0589_08)。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)18』八頁 (mi0595_08)。
- (87) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)08』四頁 (mi0585_04)。
- (88) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)13』六頁 (mi0590_06)。
- (89) William Cecil Dampier Whehan and Catherine Durning Whehan, *The Family and the Nation: A Study in Natural Inheritance and Social Responsibility* (London: Longmans, Green, and Co., 1909), 224-225 (北海道大学図書館本館貴重資料室・宮部金吾文庫)。
- (90) 同書 Charles Benedict Davenport, *Heredit in Relation to Eugenics* (New York: Henry Holt, 1911) ベニート・ムッソリーニが確立したO.N.M.I. (Opera nazionale maternitand Childza = 妊産婦と小児国家行動) を肯定的に解釈する優生学を提唱したPietro Corsi, *Protection of Maternity and Child Welfare in Italy* (Rome: Novissima, 1935) などの本を宮部は所有していた。以下のウェブサイトを参照 Hokkaido University Library 「宮部金吾文庫」『北海道大学附属図書館』2015 (<http://www.lib.hokudai.ac.jp/collections/personal/kingo-miyabe/list/>)。
- (91) 新渡戸稲造 “Scientific Improvement of the Human Race” (Editorial Jottings) 『新渡戸稲造全集』第一六巻、一九八五年、四〇五頁。

(92) 宮部金吾『宮部金吾書簡(藤田九三郎宛)007』一頁。

(93) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)12』三—四頁 (mi0589_03, mi0589_04)。

(94) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)07』一頁 (mi0584_01)。

(95) 宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸ハ太田▽稻造宛)010』一八八五年一月二五日、一—二頁。

(96) 内村鑑三・山本泰次郎訳「第二信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集五』六頁。

(97) 宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子夫人宛)02』一九一九年五月二二日、一—二頁 (mi0536_01, mi0536_02)。

(98) 内村は親しみ深く「カボよ、ゴミタメに生える小さな菌を自分の宇宙とする太ツチヨの君」や「真菌類の宮部によろしく」と書いた。内村鑑三・山本泰次郎訳「第八八信(英文封書)」『内村鑑三日記書簡全集五』一八五頁。同書「第一四五信(英文封書)」二九五頁。

(99) この点については注(55)を参照。

(100) 例えば、一八八八年に宮部は、「内村は健康ではありません。彼は長い間寝不足で苦しんでいます。時々、一週間で五時間しか寝られないこともあります。今衰弱していることは不思議なことではありません。少なくとも一年間、彼は仕事を余儀なく中断しなければなりません。帰国するかもしれません。ひどく脱力感を覚え疲れ切っているならば、そうするよう助言しました」と書いた。宮部金吾『宮部金吾書簡(婚約者保子嬢宛)12』五—六頁 (mi0589_05, mi0589_06)。

(101) 一八八四年に、札幌農学校の日常的な仕事について、宮部は次のように述べた。聖書を読み祈祷をするために七時に起きた。次に、午前八時半から午後三時半か四時まで授業、採点、研究をバランスよくこなした。その後、午後五時半か六時まで休んだり散歩をしたりして過ごした。食後は、仕事や手紙の執筆、教会のミーティングへの参加、あるいは客を接待するなどして過ごし、午後一〇時に聖書を読み祈祷をした。朝食、昼食、夕食の際は、それぞれ一時間ほどの会話を楽しんだ。宮部金吾『宮部金吾書簡(新渡戸ハ太田▽稻造宛)009』二—六頁。